第５回苫小牧駅周辺ビジョン策定検討委員会

〇事務局　それでは、皆さんおそろいになりましたのでただいまより苫小牧駅周辺ビジョン策定検討委員会、第５回委員会を開催させていただきます。

本日はお忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。

本日、座長の森先生におかれましては、今日はオンラインのほうで座長を務めていただきますので、よろしくお願いいたします。

座長の森先生、よろしくお願いいたします。

〇森座長　　委員の皆様、本日もどうぞよろしくお願いいたします。オンラインで失礼いたします。

今日は、５回目の委員会ということで、お手元の次第にあります駅周辺ビジョンの更新及び駅前の整備の考え方を資料として事務局から用意いただいているのが１つ目ですね。２つ目が実証事業についての議論をさせていただいて、３つ目、その他という次第、流れになっております。

まず、冒頭で、これまで４回と、今日５回、委員会を開催してきておりますが、これまでの議論、かなり密度の高い充実した議論を重ねてきているところですが、もう少し年度内、まだ時間もありますので、できれば、予定では第５回という話だったんですけれども、６回目ということで、次回も皆様にお集まりいただいて、議論、意見交換させていただきたいなと、事務局と相談して考えているんですけれども、委員の皆様、支障はございませんでしょうか。賛同いただけるということでよろしいでしょうか。

（異議なし）

〇森座長　ありがとうございます。それでは、次回もあるという前提でこれからの議論を進めさせていただきたいと思います。

それでは、次第、まず１つ目ということで、苫小牧駅周辺ビジョンについて、事務局から説明をまずお願いいたします。

〇事務局　お手元の資料に沿ってご説明させていただきますが、次第の１番目では１６ページ目までをまず議題１とさせていただきたいと思いますので、一通り、私のほうから説明をさせていただきたいなというふうに思います。

それでは、資料の３ページをお願いいたします。全体のスケジュールということでお示しをしておりますけれども、ここの考え方ですけれども、まずベースとなるのは旧サンプラザビルの解体というところを可能な限り早期に解体を目指すという方向性として整理をしております。その場合に、やはり跡地利用というところはセットとして考えなければいけないというところで、今年度、ステップ１にあるビジョンの策定というところを取り組んでおりますけれども、次年度、ステップ２というところで、さらに具体的な駅周辺の整備に向けた事業計画等も策定というところで、跡地をどうするのかというところをさらに

具体的に検討をし、さらに、整備をどういう体制でやっていくかというところで、一つの案としては事業者を募集、選定しながらやっていくというところが進め方としてあるのかなと思いますので、こういったところは今後の検討によって進め方は変わってくる部分はあると思うんですけれども、あくまで旧サンプラザビルをこのタイミングで解体するのが現時点では最短のスケジュール感というふうに思っておりまして、その中で全体スケジュールとしてはこうなるという考え方としてお示ししたのがこの全体スケジュールになります。

続いて、４ページをお願いいたします。これは以前からご説明しております今回の駅周辺ビジョンの進め方で、ステップ３まで終わりまして、現在、ステップ４のところで、前回お示ししたエリアコンセプトの深掘り、そして、ビジョンを具体的に描くというところを今取り組んでいるという内容です。

５ページをお願いいたします。改めてになりますけれども、この駅周辺の機能として、やはり東部の商業地と、ほかのエリアと似たような方向性ではなく、このエリアの強みを生かして、ほかのエリアとのすみ分け、あるいは連携をできる開発を目指すことは重要というところで、改めて、この位置づけを記載させていただいたものでございます。

６ページをお願いいたします。ここからは、前回お示ししたコンセプト、それから構成要素等々の更新版ということでお示しをしておりますけれども、コンセプトとしては、「創造的学び」と「暮らし」が出会う街。としておりまして、苫小牧らしい、スポーツ、文化、食等々ありますけれども、そういったものを通して、学びを通して地域の課題を解決し、活性化するというところ、それから、学び、働き、くつろぐことができることで交流を生み、創造性を高めるワークプレースという位置づけ、最後には、やはり全市民が主役になれるまちという、大きなコンセプトとして整理をしております。構成要素、それから、前回、ゾーンという区分けもしましたけれども、いろいろご意見をいただく中で、ちょっと機能を分かりやすく整理するという意味で、ゾーニングという表現をしておりました、いろいろなどういう場所にどういう機能を、それぞれが融合する中、あるいは連携する中で、配置をしていくべきかをこのような表現にしておりますけれども、最終的には、もう少し具体的な位置づけというところを整理していきたいと考えております。個別については、今日は省略をさせていただきたいと思います。

それでは、１４ページをお願いいたします。スケジュールと併せて今回のポイントになりますけれども、駅前の配置、あるいはボリュームの検討を進めてきておりますけれども、一つの考え方として、今回は表に出させていただいております。まず、Ｌ字の駅前エリアの考え方というところになりますけど、一つ変更点としては、ＪＲ苫小牧駅をエリアに入れております。今回、いろいろな検討材料をＪＲさんのほうにお示しする中で、やはりＪＲさんとしても、このエスタビルの今後についての課題感を高く持っていたというところで、せっかく市のほうでこの駅前を検討しているのに、自分たちが一緒に動かないことはないだろうということで、ぜひ区域に一緒に入れていただいて、一体として考えていただ

きたいというお話をいただいたものですから、今回、エリアの中に入れさせていただいております。具体の配置とか、ボリュームとかというのは、今後の作業ということで考えております。また、現況、例その１、その２と表現しておりますけれども、今回お示しする中で、我々の考え方の基本としては、例その１に考え方を持っておりまして、というのも、やはり旧サンプラザビルの解体というところで、例２のように、敷地を１か所で大きな敷地の使い方をするには、地下躯体の解体がどうしても伴う。ここではお示しはできませんけど、今後、整理する解体費にも大きく関わってくるところがあって、今回はこの地下躯体を解体しないで再開発をするというところで、そうであると、敷地を３分割して配置する必要があるだろうというのが一つと、それから、既存の駅前広場、交通のバス、タクシー、自家用車というところをやはり面積としては同程度をまずは基本に考える必要がありますので、そういった場合、今の敷地面積は一体ではちょっと取ることは難しいというところで、分割して配置をしている。それから、立体駐車場もやはり車社会なので必要だというところで、こうした配置が今のベースとなる案ではないかということで整理をさせていただいております。

具体的には、１５ページ、１６ページになりますけれども、これがまだ本当のたたき台なので、全て決定した事項は一つもないんですけれども、まずは、このたたき台で考え方を整理していこうと考えております。注目していただきたいのは、右の四角の前提条件になりますけれども、一つは、今までの議論の中で徐々に南に向かって低層になっていくというようなボリュームの考え方、そして、南側については、一定のパブリックスペースを設けるというところで、このような配置の考え方にしているのが一つ。それから、２つ目としては、先ほどお話しした駅前広場のサイズとして現況機能を担保しているというところ。それから、３つ目としましては、これも先ほどお話ししたタクシー、一般車、それから、バスレーンを設けているというところと、次世代のモビリティーも議論いただいたところでありますので、モビリティーハブも、将来的になるかもしれませんが、活用の想定をしているというところです。それから、既存の駅前通りから東西につながっている道路、駅前と旧サンプラザと２層式駐車場の間に今２本ありますけれども、こちらの道路については廃道するという考え方。それから、立体駐車場のボリュームというところで、今の案としては、バスレーンの上部になるべく駅、あるいは、このボリュームというか、施設に近接するような場所の配置というところでここに置くのがいいのではないかという案にさせていただいております。

これを少し立体的に表現すると、このような見え方になるというのが１６ページになりますけれども、ちょっと他市の事例も少し入れながら、表現をさせていただいておりまして、今後、より具体的なスケッチというところに移っていきたいと思います。まずは、行政が一定程度、公共機能を入れながら、ここの配置を民間投資だけではなくという考え方で、ＪＲさんにもご理解をいただいたことで一緒にというような話になったというところでございます。

前半の部分につきましては、説明は以上になります。
○森座長　次第の１つ目ですけれども、１３ページまでは、前回の議論の流れと更新の情報ということなので、まず、この１３ページまでで委員の皆様、何かご確認、ご意見がありましたら伺いたいと思います。いかがでしょうか。
それでは、次第１の本題ですね。１４、１５、１６に関しまして、今事務局のほうから具体的に駅前の大きな土地の使い方、内容としては、駐車場、モビリティーハブも含めて、広場も含めて、どのように土地を使っていくのかというところを配置図的に示していただいたものが１４ページになります。それで、この１４ページの例の１、例のその１、その２って書いてあるところで、床面積、ちょっと委員の皆様、ぴんとこないかもしれないんですけれども、全体としては１万平米ぐらいをどういうふうにこのエリアの中で配置していくのかというようなところが整理されていること、特に事務局からは説明がありましたように、例その２のほうは、解体に係る手間と費用ということも考えたときの課題なんかも触れていただきました。
それでは　千寺丸委員、いかがでしょうか。
○千寺丸委員　Ｌ字型の一番右の部分の商業、オフィス、科学センターって書いてある部分が、科学センターが駅前に来て、いろいろ子供たちだったり、ちょっとした道内からの集客というところで目指しているのかなと思うんですけれども、科学センターとかは年数がたってきたときに、どのぐらいの頻度で更新していくのかとか、結構こういうのってお金かかってくるのかなというのが正直思うんですけれども、こういうところについて、この駅前に置くのか、ちょっと今ある場所からかなり離れたところに来るのかなというふうに思ってるんですけれどもこういう施設系を固めないで、駅前に科学センターを持ってきたという意味がどうなのかなというところがちょっと思いました。
あと、この子育て支援施設に関しては、駅前に持ってくるというのは非常にいい案かなと思ってます。さらに、駐車場もあるというところで、市内からいろんな方々が集まってきてくれるかなというふうに思ってますので、非常に場所的にはすごい、子育て支援施設がこういう駅前にあるというのは、駅前の活性化にとってはすごくいいのかなというふうに思いました。以上です。
○森座長　ありがとうございます。
そうですね、科学センターに関しては、私がお手伝いさせていただいた、今進んでいる苫小牧市民ホールのほうの最初の複合の議論のときでも科学センターは当初の頃、出てたんですね。苫小牧に限らず、科学センター、今ご指摘のとおり、オープンして、リニューアルしたときに整えた設備をずっと維持できるのかという、その維持費、更新費という課題はすごく大きいところがご指摘のとおりあります。また、科学センターなので、一般的にかなりテクノロジーによった展示みたいなことをやることが多いんですけれども、テクノロジーは都度、どんどん発達、発展していくので、更新をかけていかないとほぼほぼ意味がなくなってくるというのが、この科学センターの難しいところかなと思います。その

辺り、もし事務局のほうで、科学センターのこの考え方であるだとか、現状も含めて、補足情報があればお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。
○事務局　今、森先生おっしゃったとおり、現状の市民会館のところに科学センターがありまして、公共施設としては教育委員会が所管しており、かなり老朽化が進んでいるという状態になってます。周辺一帯が新しく整備される中で、もともと科学センターの在り方というのは既に教育委員会でもいろいろ検討が進んでいるというところが現状としてはあります。これは、結論が出てる話ではないんですけれども、いろんな議論の中で、改築するのかですとか、場所等を含めて、検討はしなきゃいけないという段階であります。その中で、従来から駅前の議論の中でも、今のままでそういう機能を、同じようなもので、駅前に移せとか、そこまでの具体的な話というよりも、ああいったものを、じゃあ、どこにリニューアルしていくのかという議論の中で出てきた一つでありますので、今回、あえてこういうところで少し示しながら、例えば科学センターといういわゆる教育施設というだけではなくて、サイエンスパークという表現させていただきましたけれども、苫小牧に合ったそういうものづくりのまち、企業さんと一緒にとか、そういうような機能として、科学センターではないかもしれないけれども、そういうような機能面についても今後議論していくことが必要なのかなとは思っております。ここについては、もう少し庁内としてもどういう方向性でいくのかというのは今後より議論を深めてまいりたいと思っておりますが、今のところ可能性としては議論として上げさせていただきながら、皆さんのご意見をいただきたいなというふうに思っております。
○森座長　私的に意見させていただきますと、自分の子供の経験も踏まえていったときに、例えば１人、お子さん連れのご家族がいたというケースと、兄弟で来てるというようなときに、すごく下の子が小さくて、上の子がそこそこ育っている場合に、両方の子供のニーズとか楽しさというものをカバーするような滞在ができるといいと思うんですね。そういったときに、現状のこの配置の科学センター的な、サイエンストピックのものが、この絵でいきますと、右端のところにありますけれども、もしかしたら子育て支援と科学に触れる空間、場というものがもう少し近くに連携するという考え方もあるかなと、一案としては思うところがあるんですね。なので、今現時点でこれ、たたき台なんですけれども、どんな方々がどのように滞在を連続して過ごすのか、点として滞在することってほとんどないので、例えば２人子供連れた方、３人連れた方々がどう滞在するのか。若い高校生２人、１人がどう滞在するのかという、滞在のされる方々のバリエーションをもっと豊かに考えて、連続性を考えていくというのが今後必要になってくるかなと、今の議論を聞きながら感じたところですので、また詰めていく機会があればなと思います。
　事務局のほうからご説明ありがとうございました。
　千寺丸委員、いかがですか。よろしいでしょうか。
○千寺丸委員　大丈夫です。ありがとうございました。
○森座長　ありがとうございます。

それでは、大沼委員、よろしくお願いします。
○大沼委員　今の座長のお話ともちょっとつながるんですが、やはりここに科学センター来るというのは、千寺丸委員がおっしゃる話もよく納得できて、ここは市民ホールの話のときと、話が戻るんですけど、最初はあそこに一体でという話があって、そこから単体でという、たしか、話が流れていった経緯があると思うんですね。ですから、何かここに来るということは、やはり座長もおっしゃるように、今の科学センターの機能プラスアルファで何かないと、集客力という言葉は変かもしれないけど、子供さんたちを呼ぶにもちょっともう一つ足りないかなという気がします。
あと、もう１件、大型駐車場、モビリティーハブも含めてですね。こちらはやっぱり駅周辺ということで、こちらはなきゃならない機能だとは思うんですけれども、ちょっと今から考える必要はないんですけど、誰がやるかというのは非常に気になります。今、サンプラザの南側に、あれは２層式駐車場かな、あるんですけど、あそこも事業者の方がいらっしゃるのは分かってるんですけど、ほぼ利益が出てるとは思えませんので、ああいう方がやるのか、ほかにどんな方が事業やるのか、その事業主体ということが非常に気になります。
あと、この緑地帯の部分ですか、公園の部分、ここはもうエリア的にここしかないのかなという感じがしますね。このサンプラザの解体とちょっと絡まるかもしれませんけれども。サンプラザが地下あるんで、地下も含めて解体するかどうかという話も含めて、やっぱり緑地はここしかないのかなという、ここがちょっと気になるところでもあります。以上です。
○森座長　ありがとうございます。
事務局から、もし事務局のほうで想定している駐車場の維持、運営等に関して、補足が可能でしたらお願いいたします。
○事務局　今段階ですと、運営形態については、当然まだ決まってるという話ではないんですけれども、他都市の事例とか踏まえますと、例えば一つのやり方としては、民間でつくる場合ももちろんありますけれども、公共でつくって、運営を民間、指定管理等にして運営するという手法もやられているところがありまして、もちろん収益施設でもあることから、やり方によっては非常に上手に回るような事例もありまして、この辺は、規模等も含めて、これから少し詰めていかなきゃいけないんでしょうけれども、今回お示しさせていただいたのはあくまでも、駅周辺にはやっぱり一定程度の駐車場は必要だというところは我々も認識しておりますので、そこをどこに配置していくのかという意味で、議論の中で、今のボリュームを駅前のほうに、駅に近いところに集約したときに、やっぱりそれにはちょっと距離があってはなかなか使いづらいということで、なるべく距離感を近くしていくというような発想でまずお示ししたというところでございます。運営につきましては、今後、ハード面も含めて、両方で考えていくべきなのかなというふうに考えております。以上です。

○森座長　ありがとうございます。

駐車場に関しては、この位置の考え方は大事な考え方だなと思っています。また、バスと立体的に押さえることで、バスターミナルの雪のこととかも解消しながら、ターミナル機能をうまくつくっていくということで考えている方向性は非常にいいところかなというふうに思います。また、１６ページに、駐車場をそのままボリュームをつくってしまうと、ＪＲ札幌駅の昔の北側の駐車場がいっぱい詰まっているような感じになって、無機質になったり、人けが感じられないところが出てきたりするんですよね。なので、この１６ページの、まちのスケールが全然違いますけれども、屋上、全面ではなくとも、少し人けが見えるような工夫をしていくとか、そういうことができると駐車場も一つ景観的にも役割を担っていくかなというふうに思います。

大沼委員、ご指摘ありがとうございます。もし追加でご意見あれば、お願いします。よろしいですか。

○大沼委員　いや、今おっしゃった駐車場だけの機能じゃなくて、有効に使うというのは非常にいい案だなと思います。

○森座長　ありがとうございます。

井上委員、お願いいたします。

○井上委員　前回、欠席させていただきまして、申し訳ありません。５回目になって、前回いなかった分、すごく急激に進んだなというちょっと印象を受けております。

今回この案を見させていただいて、私も駐車場は近くに置いたほうがいいとは言ってきました。ただ、私はこの場所に立体的に上に駐車場を置くのは反対です。なぜかというと、やはり一番中心のメインのところで、バスのモビリティーとかの自由に行けるような交通の拠点にするということは非常に賛成です。ただし、駐車場をここにして、じゃあ、どれだけの数の車をここに持ってこれるのかということがあるのと、もともと座長とも話をしてましたけど、高層階にするのは絶対に反対です。やはりまちを低層階にしたい。そして、見渡せるようにしたいなと思うんですね。駅から、やはり目の前に、ここの正面にホテル、商業施設というふうに書いてますけど、結局また大きい建物を造るんですかというような感じに受けてしまいます。私はやはり駅を降りたときの空間、ここのまちのシンボル、一番の苫小牧のシンボルとなるときに、何を見せるかということはやはり非常に重要だと思います。それは、私はそこを公園であっても構わないと思います。公園から隣に、バスがあったり、モビリティーハブになるステーションがあっていいのかなと思います。やはりここにタクシーとかも、後ろに書いてますけど、ＪＲがあの場所にあるということは、必ず車椅子の方もいらっしゃるので、必ずそこから二次交通はつなげなくてはいけないかなというふうには思います。

先ほどから、あと、科学センターの話、私はもともと函館のキラリス函館みたいな、ああいったものがあればいいなというふうにお話をしてましたけど、私は非常に面白いなと思います。学びの場を、科学センターなのか、そこにいろんなものを入れていく。要は高

齢者と若い人がそこで接点を持てるような、そういう場所を持っていくというのが非常にいいなと思いまして、実は私、最近、科学館に行ってきたんですね。ＭＩＣＥ事業の下見をしてきました。そうすると、意外に大人の人たちが楽しんで遊んでて、本当に老朽化してるんですけど、意外に大人もいけるなというのが分かったので、もちろん子供もいけるので、そういったところを駅前に持ってくるというのが私は非常に面白いなというふうに拝見いたしました。以上です。

○森座長　重要なご指摘ありがとうございます。

今日の資料のこの作り方、一つのたたき台として上がってますが、やや厳しく指摘すると、ちょっと従来的な再開発の構成の仕方がやっぱり否めないなとは私も思うんですね。今、井上委員からご指摘あったように、駅前にビルが立ち並んでいるというような体感にならないようなことを考えていくということで、たとえ駅前にホテルが来ようが、駐車場が来ようが、例えば駅から改札出た後に、パブリックスペースをずっと連続しながら歩いていっている感覚になれるのか、一旦どこかの商業ビルに入って、また出口から出るというふうな行動の流れになるのかというのは、全然体験と印象が変わってくると思うんですね。なので、今例えば１６ページのボリュームの高いシンボルゾーンところが、白いグレーの建物が建ってますけれども、これの一部がもう人工地盤のように広場化していて、その一部が緑になっているような形で駅前続いているとか、そういうようなつくり方でも随分変わってくるので、この辺りはまだまだ検討が必要かなとは思いますが、ご指摘のとおり、この辺り、うまくいくようなことをぜひ進めていけたらなと思っているところですね。

函館の話で、私、以前、発言したような気がします。子供たちと函館行ったんですけど、たしか、あそこ、記憶違いかもしれないんですけれども、科学的な体験ができるフロアと、もう少し小さい子供たちが滞在できるようなフロアがセットになってたような気がするんですね。なので、そういう一連のつながり、どんな方々が利用するのか。ご指摘あったように、ご年配の方々も科学センター、私も子供と行って楽しいところもありますし、ある意味、レトロな昭和的な科学センターもある意味で面白いとこあるので、そういったところで、科学センターイコール子供じゃないよというところもぜひ議論していけたらなと思うところですね。

井上委員、ありがとうございます。井上委員、追加でご意見あればお伺いしたいですけれども、いかがでしょうか。

○井上委員　ホテルというのはもう駅前にあるので、私はやっぱりロケーションがいいところに今後考えていくべき、これは公のというか、苫小牧市がやることじゃなくて、いいまちになって、民間がそこにお店を出そうというふうな方向性に持っていきたいなと思います。

○森座長　ありがとうございます。

事務局のほうから、このホテル等々の設定に関して、何か補足があればお願いいたします。

○事務局　この今のパターンの例なんですけれども、先ほどちょっとＪＲの話も出てきたかと思うんですけれども、考え方として、駅側に寄せるということで、見た目だと何か駅とこの建物は違うようにどうしても見えるんですけれども、今後、駅のエスタビルがやはり老朽化している。あそこに対しても、ＪＲの会社としても課題感を持っていると。私どもとしても、いろんな機能をやっぱり駅側に寄せるという表現、まだそういう段階でして、どのぐらいのボリュームになるかですとか、そういうものはこれからなんですね。ただ、一方で、公共施設だけを造るという目的で今やっているわけではないので、開発に対して、民間の参画も促しながら、官民でつくっていくと、そういう観点からいろんなヒアリングをした中では、苫小牧はまだビジネスユースが結構あるので、ホテルというのは現実的にはあり得るというご意見が結構あったものですから、そういう意味でちょっとホテルと表現しております。商業といったら、何かお店がいっぱいというふうに取っちゃうんですけれども、先ほど前提で、東側は商業エリアで中心部は学びのエリアというようなすみ分け、役割分担という意味での商業という意味で、それは何かって具体なところはこれからですけれども、ちょっとしたお土産屋さんかもしれませんし、今、そういうものがないというのも一つの課題ですので、そこは大型商業施設が入るというイメージではないということです。右側のほうに科学センターを記載していますけれども、ここもどういう形がいいのか、サイズ感も含めて、機能を議論していかなきゃいけないのかなと思っていますので、このボリューム感覚は表現として何か印象が強いんですけれども、今後の議論が必要な点ですが、今段階ではこういう形でお見せしたというところでございます。なので、この駅降りたら、実はタクシー乗り場のところに行くという、そういうイメージを持っていただいたほうがいいかなと思います。今後の展開によってはＪＲさんとどのように機能をつくっていくのかということも検討が必要と思っておりますので、これから意見を踏まえまして、検討したいと思います。以上です。

○森座長　ありがとうございます。現時点での押さえどころ、明確になったかと思います。ありがとうございます。

それでは、磯貝委員、お願いいたします。

○磯貝委員　ありがとうございます。

そうですね、イメージというところで、役割がはっきりしていること自体は僕はすごいいいなと思います。その中で、役割をどうやって運用していくかというところが何か課題感がまだまだあるんだろうなと考えてますけど、学びだったり、憩える場所みたいな位置づけというものが明確に今、苫小牧市の環境においては、この地域というのはないので、そういった意味では、中心部をその立てつけにしていくということは非常に大事なのかなというふうに思います。やはりちょっとハードばっかりに寄りがちになるんですが、テーマがないと、そのハードの意味がなされないなという印象がありますので、今回こういった形で学びだったりとか、あとは、憩える場所みたいな立てつけのものが浸透していくような努力も相当必要かなというふうに思うんですけれども、位置づけとしてはすごいいい

んじゃないかなというふうに僕は感じております。ただ、いろいろ盛り込んでいらっしゃるんですが、どうやって取捨選択というところをしていくのかはすごい重要かなというふうに思いますので、そういった意味でも、まだまだ面白くなる議論の余地があるなというふうに感じました。以上です。

○森座長　ありがとうございます。そうですね、ご指摘のとおり、広場というと、苫小牧にも大きな公園であったり、いろんなところがあると思うんですけれども、やはりこの駅周辺のならではの特徴のある広場の位置づけの議論というのがこれからすごく大事になってくるかなと思います。資料は割と写真、にぎやかなど派手な写真が並んでますけれども、私からすると、やっぱり人口密度、規模が全然違うので、苫小牧に違和感のないしつらえが伴った居場所づくりみたいなところは、もっともっと市民の方の意見も吸い上げながら、情報収集しながら進めることができれば。この先が楽しみなコンテンツかなと思っています。ありがとうございます。

石森委員、いかがでしょうか。

○石森委員　たたき台として示していただいて、これからどんなものをつくり上げていったらいいのかというのが少し見えてきたような感じがします。どうしても我々、従来の発想から引きずっていますので、箱を考えるといろんな議論が出るとは思うんですけれども、この１６ページの絵を見て考えると、そこにホテル等、箱みたいな形になってますけど、これをまたちょっと違ったデザインでまた工夫すると、この広場に抜けていくようなイメージになる。

木のストリートができるとか、科学館もドーム型にするとか、木で造るとか、それから、駐車場も単なる機械だけの駐車場じゃなくて、シアターがあるような駐車場だとか、そういう意味では、こういうものをベースにしてもう少し柔軟にいろんな夢を入れながら考えると面白いなというのが感じました。

それで、ここは、交流だとか、そういう働くとかという一つのテーマがありますけれども、やっぱりこのエリアが栄えるために拠点性というか、ここで常に元気を出して活動する人がいないとまずいのではないかと思って、例えば学校機能みたいなものをどういうふうに加えていくかとか、あるいは、マンションにどんな人が住んで、居住をして、それで、活動していくかという発想、あるいは病院とか、そういったものも排除せずに、いろんなものが入り組んだ複合的なビルといいますか、複合的な施設に造り替えることも必要じゃないかと。例えば、私は商工会議所の肩書で今出てますけれども、じゃあ、民間のそういう商工会議所の機能を持ったフロアをここにうまく合築できないかというようなこととか、商工会議所だけじゃなくて、いろんな企業のそういうスペースを活用するやり方とか、これからだと思いますけれども、そういったことも併せて考えないと、やっぱり箱だけできてとか、そういうふうに夢がなくなってしまうので、そういったところは次回のまた議論の中心になっていくのかなと思いました。

それと、私は銀行出身で、いろんな地域のプロジェクト見てきましたけど、駅前で一番

失敗したのは、スペースを小さくするとか、なくしてしまうとか、そこにあった木がなくなってしまうとか、そういうことだと、昔のほうがよかったなというようなことがおっしゃる方が多かったような気がしますので、やはりボリュームというのは、広場なら広場というのを少し大きめに取るとか、そういうこれからの議論として、これをたたき台にして皆さんで議論していったらいいんじゃないかと思います。

それと、もう一つ、南側の駅前広場だけやってますが、必ず、北口の側も変わってくると思いますので、そういったところにも少し影響を与えるようなつくり方もいいんじゃないかと、こう思います。以上です。

○森座長　ありがとうございます。特に市の事務局もおっしゃってましたが、やはり今回、全面公共施設、公共事業ではなく、民間の方々が参画して、協働で進めるということですので、建物の中のコンテンツですね。どういう形のものがここの駅前のエリアに望ましいのかということと、民間の方々が積極的に参画するような動機づけになるようなことのバランスをもう適宜考えていく必要があるかなと私も思いますので、先ほど可能性を排除せずにというのは非常に大事な視点かと思います。今後、事務局のほうがコミュニケーション取っていかれると思いますが、大事にしていきたい視点だなと思ったところです。

石森委員、ありがとうございました。

荒井委員、いかがでしょうか。

○荒井委員　私もまちなかでいろいろな活動をさせていただいているので、仲間ですとか、いろんな方から早くあのビルは何とかならないのという声をもう頻繁に聞くものですから、今日のこの会議の中で進捗状況、議論の具体化ですとか、今後の進め方の方針ということを聞くことができて、少し進んでいるよと、検討が進んでいるよと胸を張って仲間に言えるのかなという、そんな期待感が持てるご提案をいただいたかなというふうに感じています。

やはり苫小牧駅のエスタビルも含めての検討ということでしたので、これまでのいろいろ議論されてきたものも含めつつ、また、新しい展開ですとか、幅の広がりが見えるのかなというところも期待ができるなと感じたポイントでした。

あとは、１５ページの検討パターンの中に赤い枠で示されている部分も今検討しているところではあるんですけれども、今、座長ですとか、石森委員もおっしゃっていたように、やっぱり東西南北の周辺ですとか、ココトマですとか、ふれんどビルさんですとか、あとは、王子製紙の敷地の緑地といいますか、芝生のエリアですとか、その辺も一体的に考えながら、よりどこに何を配置したらいいのか、建物の高さはどうかというようなことも検討が進むといいなというふうに感じておりました。これまでも、駅前ですとか、まちなかでイベントを市民で多数手がけている方もいたり、私もマルシェなどをやらせていただいたりしてたので、若い方が特にこれからもチャレンジの場ですとか、学びの場となるような場所であったらいいなというふうに思います。もちろん箱を造ったり、芝生のエリアというのも、またチャレンジの機会になるのかなと思うんですけれども、多様な人への配慮

という部分はもちろん別にあるかと思うんですけれども、多様な人の可能性も見いだせる場になったらいいなというふうに感じております。何かこのエリアにこれを置いたらとかという具体的なイメージというよりは、すごく今ちょっとわくわくと期待というような感想を持っております。以上です。

〇森座長　わくわくや期待をぜひ事務局のほうにぶつけていただいて、大いに期待していただけたらなと思います。

最後のほうにおっしゃってた、多様な活動の場とか、参画の機会みたいなところ、大事ですね。こういう駅前の開発ってなると、割と資金力のある民間さんが入ってきたり、悪い意味じゃないんですけれども、既得権的なところで占められたりというところの可能性が高いところがあるんですけれども、ちょっとこれから生まれてくるようなビジネスであるだとか、チャレンジみたいなものが市民がかいま見られるような空間、環境というものが同時につくられていくと非常にいいなと。この辺りは後半の実証事業のほうとも多分関係してくることかなと思います。大変貴重なご感想ありがとうございます。

最後に私のほうから、今、皆様方のご意見が出たのとかぶせながら幾つか申し上げさせていただきましたけれども、どうしてもこの駅前という、こういうエリアの図とか、建物のボリュームが出てくると、どうしても関心がポイント的、その土地に目が向いてしまうと思うんでけれども、そもそもこの議論の出発点というのは、ウオーカブルなエリアということで、駅から特に南のほうに向けた市民ホールのほうに向けたところをどのようにエリア形成していくのかということからスタートしているので、やはり今後も敷地の範囲内の議論を進める上でも、１５ページにある緑の矢印ですね、ウオーカブルな動線って書いてますけれども、こういうエリアとしてのイメージをやっぱり落とさずに考えていっていただきたいなと。ちょっと繰り返し発言しているような話になるんですけれども、私としては、やっぱり駅から国道までの１キロちょっとという距離は、歩くにはやや距離があるんですね。ちょっとしょっちゅう歩けるような距離ではないので、どうやったら、この赤でくくられているエリアをうまく環境デザインすることによって、１キロが体感的に例えば８００メートルぐらいの距離感覚になるのかというのがすごく大事だと思うんですね。なので、例えば赤の上のほうの苫小牧駅の改札降りて、気がついたら３００メートルぐらいもう過ぎていて、あと８００ぐらい歩ければ国道ぐらいまでだなという距離感をこの赤の縦のところで稼げるか、あるいは、逆方向から来たときに、今、飲食、商業とかモビリティーハブという南の多世代交流ゾーンとかありますけれども、その辺りまで来たらもう駅だなって思えるような環境づくりができるかな、そういうようなところが今後、建物のゾーニング、配置、具体的な空間デザインにかかってくることかなというふうに思っています。ぜひ期待しながら、今後の議論の機会を楽しみに私もしたいと思います。

委員の皆様、ありがとうございます。

それでは、本日、２つ目の次第に進めさせていただきます。２つ目は、実証事業についてということで、事務局より説明をお願いしますが、本日、アーバンデザインセンター大

宮から石黒さんにお越しいただいてます。後ほどお話も伺えるかとお聞きしていますし、自己紹介もしていただけると思いますが、本日お越しくださいまして、どうもありがとうございます。個人的には、お久しぶりです。よろしくお願いします。楽しみにしています。

それでは、次第２について、事務局より資料を基に説明をお願いいたします。

○事務局　それでは、資料の１７ページからご説明したいと思いますけれども、今日、今、ご紹介、先生からいただいた石黒さん、具体的に様々なことをこれから説明いただきますけど、今回こういう進め方というところを、我々も石黒さんのお話を聞いて、何かこういう進め方がいいんじゃないかというような整理にさせていただいている部分もありますので、ちょっと私から前段についてお話をして、具体の話は石黒さんのほうから詳しく聞いていただきたいなと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、まず、１７ページをお願いいたします。改めて、今後の進め方の整理をさせていただいておりますけれども、この駅周辺ビジョンのコンセプトを、方向性としてしっかり一つを持つというところは、先ほど磯貝さんからもお話しいただいたとおり、重要な視点かなと思ってます。その意味で、このコンセプトをしっかり目指しながら、ハード、ソフトを両面で進めていくというようなところをこのページで整理をさせていただいております。一つ、ハードの部分については、今いろいろご議論いただいた部分で、旧サンプラザビルの解体も含めて、ＪＲの駅舎等々、ここのハード整備をどうしていくかという計画をどう進めていくか。一方で、やはりせっかくいいものをつくっても、どのように使っていただくかとか、ここで活動していただくかというところが非常に重要な部分でありますし、既に様々な活動をこれまでのＣＡＰ事業の中で皆様も含めて展開をいただいている部分がありますので、その部分のいいところをしっかり今後につなげていくことも含めて、このソフトの部分は非常に重要な部分だというふうに認識をしております。

それで、今後の進め方としまして、１８ページに、一つ、考え方として整理をしておりますけれども、もともとは、この右の部分なんですが、今ある様々な組織、それから、イベント等をしっかり横連携をさせていただくという部分で、エリアプラットフォームというような受皿をつくるべき、そして、上手に行政と連携しながらというふうに考えていたんですが、石黒さんからのお話をいろいろお聞きする中でそこをしっかり専門家組織というか、しっかりそこを動かす組織として、もう一方では、やはりこういうものがないと、なかなか先ほどのコンセプトに結びつける、あるいは行政施策と結びつけるというところが難しいのではないかというところで、ここの組織をどう組成するかというのはまだまだこれからの話になりますけれども、こういうものが必要だよねというような機運とか、勉強会的な位置づけからになるかと思いますけれども、徐々に意識統一を図っていければいいかなと思っております。それで、大宮の例を参考に、仮称でアーバンデザインセンターという名前をつけさせていただいておりますけれども、こんなような進め方はどうかなと考えております。

それで、１９ページについては、ちょっと内容を書いておりますけど、石黒さんご本人

からお聞きしていただいたほうがいいかとは思いますので、私からは省略をしまして、一応２０ページ、２１ページにエリアプラットフォームの組成というところも整理させていただいておりますけど、これらも含めて、この後、石黒さんのほうから、資料も用意いただいておりますので、詳しくご説明をいただきたいなと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○ＵＤＣＯ石黒氏　初めまして、アーバンデザインセンター大宮の石黒と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

今日はお招きいただいて、２週間、３週間ぐらい前ですかね、苫小牧市の皆さんにまちの中も少し案内していただいて、我々、大宮での取組というのを着目いただいたので、そのときも少しお話しさせていただいて、実は状況としては少しちょっと近いところがありまして、駅前の開発ですとか、それから、その周辺での公共施設の再編、ここでいう市民ホールですね。それから、それに向かっていく動線のまちづくりというのを１０年、２０年のスパンで考えていくときに、どういう順番でどういう組立てをしながら、どういう調整をしていったらいいんだろうかというところの課題意識というのは実は共通しておりまして、そういう意味でも、今日の私のお話は参考にしていただければなというところで、今日伺わせていただきました。実は森先生、座長でいらっしゃるところで、学生時代に、私、北海道大学の出身ですので、お世話になっておりまして、ご無沙汰しておりますというところでございます。

じゃあ、ちょっとスライドのほう、遠くて、細かいところもありましたら、お手元見ていただければと思います。じゃあ、スライド、お願いいたします。

ＵＤＣと書いてるんですが、アーバンデザインセンターですね。これが実は全国に今２１拠点ありまして、それぞれ独立した法人であったり、任意団体の形で運営をしています。私たちは　全国で１５番目のアーバンデザインセンターとしてやっております。こちらの資料で、先ほど１９ページですかね、この丸いダイヤグラムがあったと思うんですけれども、これが２１の拠点で、皆が共通している考え方です。この左側の丸いダイヤグラムは、公民学連携ということで、公、行政ですね。それから、民、これは企業だとか、ＮＰＯとか、いろんな市民の人たち、それから、市民の団体でなく、個人としての市民の皆さんとか、そういった人たちの連携。また、学は大学だとか、研究機関、我々で言うと専門学校とか高校生さんとか、そういう人たちと次世代のまちづくりというのを一緒に考えていくという意味で、公民学連携、こういうコンセプトでそれぞれの団体が動いています。

私たちは、２０１７年に設立して、今スライドに見えているところでいきますと、大体年間の事業規模３，０００万円から４，０００万円ぐらいの規模で毎年運営をしております。ここでいう、苫小牧でいう都市再生コンセプトプランのような全体計画に当たるものというのが、大宮では２０１０年、周辺地域戦略ビジョンというようなものがありました。それを実現のために行政が初動期はすごくこれ引っ張ってやっていたんですけれども、そ

こに大学組織が、大学のスタジオというか、設計演習という課題の中で、学生さんと一緒にまちづくりの提案をしますというような経過をその後、少しずつやりながら、じゃあ、事務所を構えて、ＵＤＣの方式でこの専門家組織をここに据えてまちづくりをより推進していこうと、そうなったのがその７年後、２０１７年ということになってます。メンバーは、８名です。上から工藤、藤村、内田というのが大学の先生であり、都市計画、建築の専門家であり、ご自身で設計事務所やっていたりというような、そういった多方面でまちづくりの活動をやってらっしゃる方を先生として幹部のディレクションしていただきながら、私以下、現場で地元の皆さんといろいろやり取りするメンバーが５人おります。

ここが私たちの事務所なんですけれども、アーバンデザインセンターのオフィスですね。奥に私たちの事務所があって、手前にまちづくりのことを情報発信する展示スペースがあります。これは日々、例えば模型だとか、それから、何かの催しだったり、ワークショップであったり、勉強会というところでのフライヤーをここに貼り込んでいったりだとか、今こういうことをやってるよというのがふらっと立ち寄った人が分かるという状態をつくりたいという展示スペースです。

実はそこのスペースの少し手前に、隣接しているんですけれども、イベントスペースというのがあって、まちづくりのためであれば、ただで借りることができるスペースです。私たちはそこで、ここにいるまちの皆さんと議論をして、こういうプロジェクトは起こせないだろうか、どうだろうかとか、最近こういうことがあって、将来のまちづくりを考えたときに、こんなことを今仕掛けておくといいんじゃないだろうかというようなまちづくりの議論というのをしています。

と同時に、そういった活動を年間通じて活動を外に対して情報発信をしていくというものですね。今日、ちょっとお持ちしてなかったんですけれども、冊子を毎年作っていたりだとか、まちの人を紹介する情報紙面を作って、それを皆さんに配布していたりだとかというようなことをやっていて、デザインを統一させながら、それぞれのまちの人たちの人の個性が際立つような紙面の作り方というのを特に注視してやっています。

こういった今の場所の運営というのは、まちラボという、スペースの全てをまちラボと呼んでるんですけれども、そこの運営を行政からの委託の形でアーバンデザインセンターは運営をしております。私たちは、先ほどご紹介もあったように、専門家組織なので、まちの中のいろんな都市更新の動きだとか、それから、市民活動の動きというのを、事務所をここに構えながら、感じながらやっているわけなんですけれども、この地図に写っているまちづくりというのは本当にたくさん今動いていまして、真ん中に鉄道が通っています。大宮はご存じのとおり、交通ターミナルですので、新幹線の拠点、ハブであり、高崎線、京浜東北線、埼京線、いろいろな路線がたくさん入ってまして、そういうところの駅、ターミナル駅から人がたくさん毎日往来しているわけなんですけれども、まちの課題としては、人が外に出てこない、駅は通るけれども、まちに人が出てこないというのが課題なんですね。つまり、ルミネさんだとか、駅で用事が済んでしまうので、まちに人が出てこな

い。それを何とかウオーカブルなまちづくりをすることによって、公共施設への動線を豊かにし、そこに回遊性を生まれさせることで、既存の店舗が経済効果を生んでいくような、そういう空間づくり、あるいは景観づくりをやっていこうというのがここに出ている赤い路線ですね。私たち、実はインフィニティストリートと呼んでますけれども、要は重点街路を設定しながら、既存の通りを活性化していくということに取り組んでます。右側に、丸３つぐらいあるんですけれども、ここが公共施設の再編用地です。上から図書館、博物館だとか、それから、真ん中は小学校と旧区役所の建物とか、２ヘクタールぐらいあります。それから、下の丸は新区役所と、あと、市民会館とかのエリアなんですけれども、そういう新しくこれから造り替えていく公共施設に向かって動線を延ばしていくと。回遊、そうですね、これは八の字ですね。無限大のインフィニティー、八の字を描いて回遊させていくということを意図しています。

次、お願いします。このプロジェクトは、駅周辺全体でいくとやっぱり２０年はかかるかなというとこなので、ビジョン策定してから、個別の事業に振り分けられて、個別事業でやっていくわけです。そうすると、最初のビジョンというのは非常に緩やかなので、それを具体化、実現化するときには、ちょっと忘れちゃうというか薄れてしまうので、最初に意見いただいてたものというのを具体的に実現するレベルでの調整というのが必要になってくるわけですね。

各個別事業計画の間にＵＤＣという専門組織が入って、全体構想と事業計画の間をつないでいこうという発想で、私たち、進行管理の役割を担っています。デザインコーディネートと我々は呼んでますけれども、具体的には、例えば通りでのマネジメント組織の醸成であったりだとか、公共施設のすぐ前に広場をつくるんであれば、その公共空間のプロデュースをしたりだとか、それから、駅だとか、再開発事業があるんであれば、そのデザインの足元回りのどういう景観をつくっていったらいいかと、そういうデザイン調整というのもデザインコーディネートと呼んでおります。

今日、そういった駅周辺関係の取組は、ちょっとスライドとしては割愛してきておりまして、大宮も実は本当にこういう先ほどの議論というのを積み重ねてやっております。その間に、我々もパブリックスペースの専門家として、どういう人の体験をつくっていくかというところで、都市空間、助言をさせていただいているんですけれども、その根拠になることとして、大宮での地場の活動があります。名前はストリートテラスという名前なんですけれども、２０１７年から、今６年目が終わりまして、次、７年目に入るんですけれども、こういった公共空間の利活用を続けてきております。

私たちのこのストリートテラスのコンセプトなんですけれども、大宮らしい新しい日常をつくろうというのがコンセプトです。これは、当たり前のことに見えるんですけれども、実は意図としては、イベントではないということなんですね。日常をつくろうということを意図しています。これは、公共空間の豊かな体験をすることをできるようにしよう。これは例えば子供を連れて、平日に遊ばせることができる広場があるというのは、イベント

ではないですし、例えば夜、ちょっと仕事の帰りに立ち寄れる、人の集まっている、お酒の飲めるところがあるとか、買って食べるようなところがあるとか、そういうのって日常なので、それから、学習ですね、ココトマに今日、朝、行きましたら、ココトマで学生さんがすごい勉強してますよね。ああいうのって日常ですよね。やっぱり家庭環境自体が整っている子供たちばかりではないので、まちの中にそういう集中できるとことかがあると、非常に日常的に使ってくれるわけですね。そういう公共空間をつくっていくというのは非常に大事なことで、それから、それが経済効果につながること。沿道の経済効果ですね。それから、沿道経営体と書いているのは、コミュニティーの話ですね。最終的にはこれからできていく公共空間を運営できるチームをつくりたいというコンセプトでやっております。その流れとして、この丸３つ描きましたけれども、最初に、日常的な居場所を増やす。それが生活の質につながる。そして、愛着が湧いて、移り込む、あるいは、ここで起業して店舗を、事業を起こすとか、そういうことにつながっていくのがまちのハッピーな姿だと思います。

最終的に、このウオーカブルなまちづくりというのを地域のストックが、このストックを活用してくれる人がこのまちに来てくれることというのにつなげていくのが大事だと思っていて、このウオーカブルなまちづくりは、日常的な居場所を増やす、これを目的にするといいと思ってます。

じゃあ、具体的に何をしてきたのかといいますと、最初は使われてないところをとにかく使ってきました。道路を拡幅します。用地買収したんですけれども、特段整備始まるまでは使ってませんよというところを、囲いをかけて使っていない、ストックヤードになってるってあるんで、そういうところを地域の人たちと一緒に使うよというところから始めました。

こう絵を描きながら、鍵形にできてくる、例えば空き地だとか駐車場だとか、道路をセットバックしたとことか、そういうところを鍵形にして、みんなで使っていきましょうという絵を最初に共有したんですね。

それを２０１７年から１９年ぐらいまで、ずっと皆さんとやりました。最初は、本当に１０日とか、短い期間ですね、１０日とか、２週間。そういうのでやっていくんですけれども、徐々に半年とか１年とかというふうに長くなっていきます。

最初はこういう、りくぜんって、今真ん中に書いてますけれども、看板を色をそろえて立てていただく。ポロのマーク描いてますけれども、これ、店舗の方が描いたマークですね、手書きで。それを自分たちの個性を看板で出すみたいなことから、特段、このストリートテラスに参画していなくても、看板を置いてくれるみたいなことから、通りの色とか、通りのイメージをつくっていこうというブランディングに取り組みました。

例えばテーブルとか什器だとか、そういうことをそろえて使っていったりだとか、右上の若い女性の方がいると思うんですけれども、オンラインでアクセサリーショップやってる方なんですよね。この方は、大宮に店舗を持つのはちょっとハードルが高いので、どれ

ぐらい売れるかというか、まず、興味を持ってもらえるかをサウンディングしたいというのが意図で、アクセサリーを２日限定でこの方は出していただいた。そしたら、１日で４万５，０００円とか、すごい売れまして、これだったら、私、来る価値あるわということで、次から協力してくれると同時に、企画に参加してくれるようになりました。とか、そういう方々が何人もいらっしゃいます。

これは社会実験としてやってますので、ちゃんとその効果を検証します。通りの人数がどのぐらい増えたかとか、売上げだとか、それから、その売上げの期待値との差とかということを効果検証しながら、一体その取組、通りとしての取組にどれだけの投資効果があったのかって、それはお金として跳ね返ってくるものだけでなく、コミュニティーの醸成としてどのぐらい効果あったのかということもヒアリングベースでちゃんと聞いていきます。

そうしていきますと、ちょっとコロナの時代になってしまいまして、２０２０年の６月から、そのままストリートテラスの取組というのを飲食店支援のほうに持っていきました。これは、軒先１メートルの道路空間、公共空間を占用して、そこに客席を設けてくださいと。客席、室内で減らさざるを得なかったので、表に出て、どうぞ客席つくってください。そこで売上げ上げてくださいと。じゃあ、どのぐらい売上げが補填になるかちょっと分からないんですけれども、我々、そこの道路占用の支援だとか、そういうコーディネートをやって、地域の皆さんと協働しました。

ここに出ているような、さいたま市の皆さんもいまして、それから、地域の食品卸の会社さんだとか、商店街振興組合さんだとか、それから、飲食店を数多く手がけてらっしゃる事業者さんだとか、そういうとこと協働しながら体制をつくっていくということで、我々はあくまでコーディネーターということで、例えば現場の例えば日々の清掃だとか、什器の撤収、設置だとかは、お店のすぐ前のことですので、お店の方がやっていたりしますし、月に１度の清掃活動みたいなことも基本的に商店街さんが核となりながら、我々もそこに参加をしてやっていたりというようなことで、やっております。これは、実は今２年半ぐらいですかね、続いてきております。一つ前に戻っていただいていいですか、すみません。下に期間が書いておりまして、最初６か月なんですけれども、やっぱり延長しようってなって、１年延ばした。さらにもう１年延ばして、まだやってますね。ということで、合計で、最初は短いんですけど、どんどん長くやらせていただけるようなことになっていってます。

これも売上げの効果検証とかもちゃんとやってます。

次に、キッチンカーの取組というのもあって、これは日々のお昼のランチを食べられる場所をつくろうと。オフィスワーカーの方、多いので、ランチをちゃんと食べられるような場所をつくろうと。それをお店の中に入るんじゃなくて、もう地域の個性的なお店さんにキッチンカーで出店していただいて、これもコロナ以後、特にキッチンカー事業者さん増えましたので、そういう支援の意味でも役立ったかなと思います。これも２年半ぐらい

延長して実施をしていってます。延長というのは、つまり道路の占用許可が、そんなに長い期間取れませんので、半年、半年というような、続けながら長くしていくということで、だんだん日常化していく。

週末だけやるとかではなく、実はランチなので、これはお昼、平日にやるというもので、カレンダーが埋まるぐらいの、そういう売上げになっていってます。

売上げの効果検証とか、出店者に対するアンケートというのももちろんやっていきます。

次は、これ植物のプロジェクトなんですけれども、ストリートプランツプロジェクトというやつで、街路の緑化は基本的に行政がやるものですが、行政の土地なので、やりますけれども、それを公民連携でやっていこうというプロジェクト。

それは具体的に何かというと、通りに置くプランターにＱＲコードがついていまして、ＱＲコードを読み込むと、クラウドファンディングにつながっていて、購入とか、協賛というのができます。購入というのは、協賛をするときに一定の額を納めると、そのメニュー、リターンメニューとして１鉢プレゼントというようなものを購入と呼んでますけれども、そこで得た資金というのを、実は地元の植木生産者の方に返したりだとか、それから、維持管理をしてくれる、そのすぐ前のお店さんに維持管理費をお支払いしたり、それから、我々運営していくためのというのに３分の１ずつ資金を循環させていくということをやっています。

こういった風景になるんですけれども、やっぱり街路の樹木は統一されたもので管理しやすいものが並んでいきますが、実は大宮のすぐ周辺には江戸時代から続く植木の生産地がありまして、日本四大生産地と言われている植木、苗木の生産地なんですね。その植物がかなり質が高くて、観葉植物みたいなものだったりするものですから、そういうことが通りの景観をつくっていく、産業が景観をつくるみたいなことはすごく重要なファクターで、地元の支援があってこその取組になっています。こういった空間で、滞在空間とセットで公共空間を使っています。

効果検証は、人の流れだとか、それによって緑がどのくらい増えたかということも検証していきます。

という、ほかにも実は幾つかありまして、いろいろあるんですけれども、また別な機会といたしまして、そういった取組全てを我々、ストリート何々というのをたくさんやってますけれども、それを総称してストリートテラスと呼んでます。なので、各それぞれのばらばらな取組が、ばらばらにやってもいいんですけれども、それも一概に悪いわけじゃないんですけれども、デザインを、ロゴを統一したりだとか、打ち出し方を統一して、ストリートテラスという名前でやっていくという形を取っています。それを大宮では、これをできる人を育てるというプログラムをやっていまして、ストリートデザインスクールというのをやっています。

これは、我々の組織だけだと、先ほど見ていただいたように、５名しかいませんので、本当にできることが限られてしまうものですから、地元に興味のある人たちをスクールの

形を通して受講生として来ていただいて、仲間を増やしていくということをやってます。今２年目に入りましたけれども、そうですね、１年で大体２０名の方が我々の顔なじみのメンバーになってくれるというような体制を取れています。これ、続けていくと、どんどん力になっていくと思うので、こういったこともやり始めております。

これは受講生がつくった風景です。先ほどのストリートプランツを使って、古着のマーケットをやったというものですね。

地元のコンテンツを支える事業者の皆さんとやっぱりつながりができてくるので、そういう人たちと今、写真ちょっと小さいですけれども、こういう人たちと一緒にやっています。

こちらのメンバーですね、先ほどのエリアプラットフォームのメンバーです。我々は、そのアーバンデザインセンターと別で、エリアプラットフォームの運営ということで、それは企業の皆さんと協働していまして、例えば埼玉りそな銀行さんだとか、武蔵野銀行さんとか、地銀さん、それから、都市整備公社さんとか、公園緑地協会と言われるような第三セクターの皆さんと協働しながら、エリアプラットフォームというのを運営しています。

これ、最後になります。重要なところなんですけれども、やっぱり最初に申し上げたとおり、計画自体は本当に２０年、３０年かかっていくものになるので、それに向けて、最初はストリートから取り組んでいくということをやっているわけなんですが、先ほどのビジョン策定のこの資料の中にもありましたけれども、後々３，０００平米とか５，０００平米の公共空間ができていく。それが突然建ち現れても、それを運営するのってなかなかプロしかできないと思うんですね。そういうプロの方、もちろんいらっしゃられたらそれでいいのかもしれないんですけれども、地元の方、大宮の場合はそういう方、なかなかいなくて、地元のコンテンツとして、地元の人たちが活躍できる公共空間の活用をつくっていくためには、徐々に練習していかなきゃいけないというのがあるんですね。なので、ノウハウを蓄積して、どういう仕組みだったら、みんなが適正に運営できるようになって、事業展開とともにできてくる、最初は数百平米から、その後は５００平米とか、１，０００平米とか、最後できてくる、大宮の場合は４，０００平米ぐらいなんですけれども、その広場を運営していくためのチームをつくろうということでやっています。これはまだ実現しているわけではないので、我々の今後の考え方ではありますが、以上になります。

一応、中身としては、これ、ウェブでも見られるんですけれども、こういった冊子、またできてますので、ＱＲコード読み込んでいただくと後ほど見られると思いますので。

少し長くなりました。ありがとうございました。

〇森座長　興味深くて、勉強になる話題提供していただいたと思います。ありがとうございます。

それでは、委員の皆様、今、石黒さんのほうから非常にヒントになることとか、ある種、目標となるような具体的なコンテンツを示していただいたと思います。委員の皆さんからご感想、ご意見、あるいはご質問いただきたいと思います。

千寺丸委員、いかがでしょうか。
○千寺丸委員　非常に面白い話、ありがとうございました。
僕が一番思ったのは、この日常的な居場所を増やすというところの話がすごく、これだけで何かどきどきするかなというように思いました。やっぱり人が集まるには、何か毎日イベントのようなことがないと、なかなか人が集まってこないのかなと思ってるんですけれども、何か形式的に毎日いろんなことが若い人たちを中心に行えるようなストリートができると、そこに日頃から集まってくるようなことになると、だんだんとそれが日常的なロケーションになるのかなというふうに思って、さっきの荒井委員じゃないんですけれども、わくわくしたというか、わくわくするような感じで思いました。何か苫小牧というか、北海道だと、どうしても冬期間の道路について、どういうふうにやっていくのかというところをこれから考えなきゃならないんですけれども、季節によっていろいろ移り変われるようなロケーション、ストリートづくりをしていくというのは、すごく面白いなというふうに思ってました。苫小牧でもこういうものづくりとか、ショップとかやっている方、いろんな人いると思うので、あとは、いろんな高齢者から若年層まで、いろんな方が集えるようなまちづくりで、こういういろんな角度から見られるようなところができれば、非常に面白いなというふうに思ってました。私もずっと苫小牧にいるので、昔の苫小牧の駅周辺の人の流れというのは見てきたんですけれども、やっぱり今、人の流れが全くないような状況で、ちょっと寂しいというところ。やっぱり昔のような人があふれてるような景色がまた戻ってくればいいなというふうに思ってます。非常に楽しくお話聞かせていただきました。ありがとうございました。
○森座長　話が出てきましたけれども、ご自身の北海道での体験、経験を含めて、何かコメントいただければと思いますけど、いかがですか。
○ＵＤＣＯ石黒氏　そうですね、私、実は札幌出身なので、雪のあるまちの過ごし方というのは子供の頃から分かるんですけれども、苫小牧ともちょっと違うかもしれませんけどね。でも、冬の歩くということと、夏歩くということ、両面考えなきゃいけない中で、実は夏、もっと生かせると思ったんですよね。夏って本当に過ごしやすいので、実は関東の人は逆に夏が困ってるという感じがあって、なので、夏の生かし方をもっとクリエーティブに考えていくということとか、冬場、例えば除雪の協力をみんなでやれば、その分、公共空間が借りられるようになるとか、そういう冬と夏のバーターの関係というのも考えていけるのかななんて思ったりしていますので、これを機会に、機会があれば、そういった冬のウオーカブルも考えていければいいなと思ってます。
○森座長　ありがとうございます。
大沼委員、いかがですか。
○大沼委員　意外性があっていいなと思います。事業期間がすごく長いので、これは非常に苫小牧も中途半端な気持ちではできないなという印象があったのと、このストリートを利用したこのイメージが非常にいいなと。ウオーカブルという、これ、歩いて楽しそうな

空間がすごくあるなと思います。あと、この地元の企業の民間の協賛だとか、クラウドファンディングをすごくうまく活用した形でできているのがすごく羨ましいなと。やっぱりなかなかこれ、行政主導ということだけでは、一筋縄にはいかないなという印象をすごく持たせていただきました。以上です。
○ＵＤＣＯ石黒氏　ありがとうございます。
○森座長　まちの方々が本気になれるかどうかというのは、一つ最初のスタートアップでポイントになると思いますけれども、石黒さん、その辺りの何かご経験、ご感想、工夫とかありましたらお願いします。
○ＵＤＣＯ石黒氏　スタートアップのところでしょうか。
○森座長　そうですね、今うまくいろいろ活動回ってますけれども、最初、全員の方々がポジティブなわけではないと思うんですね。どんどん巻き込んでいく、本気になっていただくといったところのイニシアチブの取り方みたいなところで、少しコメントいただければと思いますけど。
○ＵＤＣＯ石黒氏　そうですね、大宮もやはり森座長がおっしゃるような状況で、賛同いただく方というのは、最初、やっぱり少数なんですけれども、実の空間を見ると、ああ、これだったらとか、何かすごい不安で、もしかしたら何やられるか分かんないという不安でもしかしたら反対していたかもしれなくて、ああ、これぐらいだったら大丈夫だったなという安全性のことだとか、音とか臭いとか、そういうところも、そこにいらっしゃる方は気になるものですけれども、実の空間を見ると、ああ、これだったらというようなことで賛同を得ていく。それが要は続いていくと、期間が長くても大丈夫になっていくというか、そういうことで、最初に賛同できる方と、本当に短期間でいいので、やってみることというのは、すごく大事なことかなと思います。それは、最初から大きくなくていいので、小さくてもきらりと光る苫小牧のコンテンツというか、そういうことを試していけると、そのスタートアップにはつながるんじゃないでしょうか。
○森座長　井上委員、お願いします。
○井上委員　本当に勉強になるお話をありがとうございます。改めて、まちは行政や民間の企業がつくるんじゃなくて、まちは人がつくっていくんだなという、本当にそういったお手本を示していただいたんだなと思います。そういう本気になれる人、何かそれを楽しんでまちをつくっていく人を増やしていくことが非常に重要なんだなということを改めて感じました。苫小牧ってどうしてこんなに人が歩かないんだろうって、別に苫小牧だけじゃなくて、地方都市ってみんなそうじゃないですか。今回のテーマって、ウオーカブルなまちをつくろうなんですけど、歩くこととか、まちを見て発見ってすごくあったり、やはりそういう歩いて楽しむということをこの地方都市の私たちも感じられる、そういうまちを自分たちも参画してつくっていけたらいいなということは改めて思いました。ありがとうございます。
○ＵＤＣＯ石黒氏　ありがとうございます。発見があるというか、まちを歩いてたら発見

あるというのは本当に楽しいですよね。
○井上委員　そうですよね。
○森座長　それでは、磯貝委員、いかがでしょうか。
○磯貝委員　ありがとうございます。面白いお話ありがとうございます。そうですね、まちづくりにおいて、結構最初のときから僕はずっと気になっているところ、気になっているところというか、成功事例って再現性がないという話をずっと言っていたんですけれども、まさにここが何かお話を聞いてて、大宮らしいまちづくりの、これはプラットフォームというふうに書かれてますけど、大宮らしさというところって、端的に言って何になりますか。
○ＵＤＣＯ石黒氏　そうですね、大宮らしさというのは、見つかっていない文化がたくさんあるというのが大宮らしいことなんですね。要は歴史がすごく重なり過ぎてて、中山道から歴史が重なり過ぎてて、見つかってないものがそこらじゅうにあるというのが、それを掘り出すのが楽しいというのが大宮らしいんだと思います、多分ね。本当にたくさんあるんですね。神社が歴史が長いものですけど、近代漫画とか、盆栽だとか、鉄道だとか、それから、生糸の文化ですね、富岡製糸場との連携してたりですね。本当にいろいろあって、それは実は聞いていくと、古着も実は文化だったなとか、そうやって発見的に見られるところが、多分何か深みのあるところ、大宮らしいのかもしれないですね。重なっているという感じです。
○磯貝委員　何かそこがまさに苫小牧にも重要なんじゃないかなというふうに、苫小牧らしさというところからのまちづくりというものを重ねていかないと、多分物事がうまくいかないんじゃないかなという、そういったところから、視点をもっとウオーカブルに多分持っていったから、こういった形にできたのかなというのがすごい面白いなって、今お聞きしてて感じたところでございます。何か今後、苫小牧らしさというところ、この会でも何か面白い形で議論できたらすごいいいなというふうに聞きながら考えておりました。ありがとうございました。
○ＵＤＣＯ石黒氏　ありがとうございます。
○石森委員　よろしいですか。
○森座長　はい、お願いします。
○石森委員　この法人、一般社団法人ですよね。これ、国交省との関係もかなりあるんですか。
○ＵＤＣＯ石黒氏　そうですね、国交省とは街路交通施設課さんというところとかなり街路のまちづくりの意見交換なんかも盛んにやっておりますので。
○石森委員　そうですか。それ、社団法人の認可は国交省で。
○ＵＤＣＯ石黒氏　ではないです。
○石森委員　もうそれは自由にできるんですか。
○ＵＤＣＯ石黒氏　それは自由に。ただ地域のまちづくり団体として、そういった意見交

換をしてるというだけです。
○石森委員　もし本当にそうであれば、ぜひ北海道と、空白ですので、そういう意味で、先ほどの夏の最大有効化と雪の組合せのまちづくり、非常に面白いんじゃないかというふうに、ぜひここに一つ、この間、「ブラタモリ」に苫小牧が出て、すごい反響だったんですけれども、やっぱり探せばいろんなものがあるんですね。歴史的なものとか、企業の歴史も含めてですね。そういうものを掘り起こしていくためには、やっぱりある程度このようなまちづくりの組織というのが絶対必要だなというふうに、先ほど聞いてて思いましたので、実現に向けて、どういう形になるかですけれども、いいお話を聞かせていただきました。ありがとうございました。
○ＵＤＣＯ石黒氏　ありがとうございます。コメント的には、実は私たちも、私、札幌出身で、大宮にはゆかりがなかったものですから、結局地元の人に教えてもらって、そういうことに気づいてるという感じはあるんですね。例えば植木のプロジェクトだったら、この通りで実は植木市をやってたよ、４０年前にと言われて、写真をアーカイブセンターという役所のところに探しに行ったら、ああ、今よりもウオーカブルじゃないかと。すごいびっくりして、じゃあ、それ、やりましょうってなったりとか、何か地域の人に教えてもらいながら、そういうことが掘り起こされていくというのが理想的だなと思ってます。
○石森委員　ありがとうございました。
○森座長　お願いします。
○荒井委員　すごく何かやっぱりデザインって大事だなって率直に資料を拝見して感じたところでした。やっぱりあとは、イベントだけで終わらず、日常をつくるというところに私もすごい感銘を受けた点が、なるほどなというふうに思っていました。イベントばっかりで、何かやるほうはイベント疲れしちゃうという部分もありつつ、だけど、結構苫小牧の人ってイベントを楽しみにして、そのイベントがあると、いろいろはしごしたり、わざわざ出向くということが市民性というか、そんなような、新しいお店があったら結構すぐ行くって、長蛇の列をつくってというところもあったりするので、それが単発的に終わらないで、本当に日常になっていくということが目指してるところだったり、あとは、通過型のまちと言われているような苫小牧なので、新千歳空港を降りて、フェリー降りて、滞在できるような、住民も楽しめるし、遠方から来た人にも滞在してもらえるような空間になると、より一層いいのかなというふうに話聞いて思っていました。あとは、苫小牧でもいろんなイベントですとか、まちづくりに関わっている方はたくさんいるんですけれども、やっぱりそれが点在しているというところは、ちょっと課題というか、検討の余地があるなというのは感じていたところなんですけれども、それをつなぐ役目をされているというところもすばらしいなと思いました。なかなかやりたいって思う人はたくさんいるんですけれども、そこから関係を構築したり、育てて、信頼関係をつくって一緒に協働していくというところまで進めるのって、手間もかかるし、結構時間もかかったりという部分があるんですけれども、それを学びの機会を通じてやっていらっしゃるというところもすごく

興味深くお話聞いておりました。そうですね、私もテレビとかを先日見て、すごく影響を受けたんですけれども、やっぱり先ほども大宮らしさって何だろうというお話から、苫小牧らしさって何だろうなというふうに私も先日から考えていたんですけれども、やっぱり物流だったり、工業で発展したというところには、何か裏方として支えてきた産業とかもたくさんあったりして、直接的にはこのまちづくりとか、ウオーカブルなまちづくりには関係ないのかもしれないんですけれど、そういった産業を知る、まちづくりの展示もあったんですけれども、そういった要素もあると、より苫小牧の歴史なり、文化を知れる機会になるので、本当に常にそういった展示があって、市民の人だったり、来訪した方が見られるスポットもいいなというふうに感じました。以上です。

○ＵＤＣＯ石黒氏　ありがとうございます。そうですね、ちょっと誤解なく、イベント自体は特に悪いとは思ってなくて、あと、イベントのときにかけるマンパワーというか、すごいマンパワーかけなきゃいけないというところのつらさをすごくよく分かってるので、あれを続けることのつらさというのも実は日常が大事というところの根拠だったりもするんですけど、実はイベントを続けながら日常化したという例の一つに、神戸の東遊園地というところでやっているファーマーズマーケットの取組があるんですけれども、それは毎週土曜日やるという形で、マーケットのイベントやってるんですけれども、出店する方が本当に創意工夫をするようになって、いわゆる運営という、イベンターとしての運営というのがほとんどなくなっていくというか、だんだん少なくなっていくという形を取れていて、そこに出ている出店者さんなんかも、クラフトの方いたり、野菜の方いたり、食事を作ってる方もいるし、いろんな方が来て、そこがコミュニティーになってくるという、そういうのはすごく理想的だなと私は外から見ていて思っていて、神戸の六甲山の裏側の西区というところにある、野菜が外に出てくるんですよ。ああ、こんな地元野菜あったんだとかといって、地元の人たちが休日来たら、午前中だけじゃなく、昼を食べてちょっと過ごして帰るぐらいの滞在時間が延びてくるんですね。そういう事例もありますし、何か多分いろんな考え方があるんだろうなと思ってます。ありがとうございます。

○荒井委員　ありがとうございます。

○森座長　活発な意見交換をしていただいたと思います。

　やはり石黒さんが苫小牧に来て何かをしてくれるわけではないので、デザインセンターの大宮の支店ができるわけでもないので、これから重要なのは、今日、情報提供いただいたある種の目標というか、具体的な目標像に対して、苫小牧として自力でどうやってやっていくのかというようなことが今後大事な議論になってくるかなと思います。次の回でもこの辺の実証事業と絡めながら、議論を深められたらなというふうに思います。

　石黒さん、どうもありがとうございました。

○ＵＤＣＯ石黒氏　こちらこそどうもありがとうございました。

○森座長　またぜひ情報共有等お願いしたいと思います。ありがとうございました。

○ＵＤＣＯ石黒氏　お願いします。

○森座長　それでは、次第の２番目まで来ました。

今日、その他ということなんですけど、まず、委員の皆様から何か全体通してご意見、あるいはご質問等がありましたらお願いします。よろしいでしょうか。

今日は非常に密度の高い議論だったと思います。以上で次第全て終了しましたので、進行を事務局にお返しします。ありがとうございました。

○事務局　ありがとうございました。

リモートで小早川さんが入っていただいてるんですけれども、聞こえてらっしゃいますか。

○小早川委員　はい、小早川です。

○事務局　何かご意見等ありましたら、頂戴したいと思いますが、いかがでしょうか。

○小早川委員　大宮の事例等は非常に参考になって、よく行くまちなので、ああ、なるほどな、こういうふうにしてできたのかというのを感じてました。参考になる事例だと思いました。ありがとうございます。

○事務局　どうもありがとうございました。

それでは、最後、締めさせていただきたいと思いますけれども、冒頭、ご承認いただきました第６回の検討委員会につきましては、現在のところ、２月頃の開催というふうに我々考えておりますけれども、また森先生とも詳細を打合せをして、追ってこちらからご連絡をさせていただきたいと思いますので、ぜひご出席のほどよろしくお願いいたします。

それでは、以上をもちまして第５回検討委員会を閉会させていただきます。本日はありがとうございました。